Eテレ幼児番組を視聴し放送と心理学の連携について語り合う

企　　画：　村野井 均　　（茨城大学）
ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ：　子安 増生　　（甲南大学）
木村 美奈子　　（名城大学）
宇治橋 祐之 ＃　　（NHK 放送文化研究所）
村野井 均　　（茨城大学）

［企画主旨］

日本は、60 年も前から教育チャンネル（NHK E テレ）を持っている珍しい国である。全国どこでも、テレビを通して学ぶことができる体制が整っているのである。特に乳児から児童向け番組は豊富に制作されており、その中でも「おかあさんといっしょ」は、1959 年から放送されている長寿番組である。

子どもがわかる番組を作るためには、子どもの視聴能力や発達の把握が重要であり、随所で心理学が関わってきた。その代表が「2 歳児テレビ研究会」（1979）である。「おかあさんといっしょ」を 3 歳児向けから 2 歳児向けに作り替える際に、番組を試作し、実験や観察により子どもの注視時間、注視対象、発言を分析した。この結果に基づいて、コーナー単位の制作から 3 分程度のセグメントを積み重ねる方法に切り替え（「パジャマでおじゃま」、ボタンやヒモのショートアニメーション等）、体操もお兄さんがスタジオを動き回る形から、その場で体操する形に切り替えられた（「ハイ・ポーズ」、「イチジョウマン」等）。

その後も、この形式は引き継がれるとともに、視聴者の要望にこたえる形で、1996 年には、0 歳から 2 歳児を対象にした「いないいないばあ！」が始まり、2009 年には 4 歳児から 6 歳児を対象にした「みいつけた！」が放送されている。それぞれ心理学研究者が関わっている。

「おかあさんといっしょ」は、「2 歳児テレビ研究会」の時代から 40 年経っており、制作目的や作り方も変わっている。「いないいないばあ！」や「みいつけた！」にも心理学研究者が参加し、心理学の知見が生かされている。ところが心理学で番組について議論をする場は、設けられてこなかった。

現代は、誰もが情報を発信し、受け止めることのできるインターネット全盛の時代である。乳児期からインターネットやスマートフォンにより、好きな物ばかり選択して視聴することができる時代になっている。全国どこでも視聴できる教育放送の意義とあり方の検討に、心理学者も積極的にかかわってゆくべきである。

今回のラウンドテーブルでは、NHK の研究員と発達心理学研究者がいっしょになって、心理学が協力した番組を視聴し、心理学がどう生かされているか、今後どのような研究および研究協力が必要なのか語り合いたい。

［取り上げる番組］

ラウンドテーブル当日は、2020 年 2 月 18 日（火）に放送する「おかあさんといっしょ」、「いないいないばあ！」、「みいつけた！」を取り上げる予定である。ダイジェストは用意するが、関心のある方は事前視聴をお願いしたい。なお、番組ホームページに記載された基本情報は下記の通りである。

「いないいないばあ！」 ０～２歳対象 月～土；24 分	映像と音で感覚を揺さぶることにより、子どもたちのさまざまな可能性と能力を引き出すことをねらいとしています。親子の豊かな関わりあいのきっかけとなることもめざしています。
「おかあさんといっしょ」 ２～４歳対象 月～金；15 分	2 歳から 4 歳児を対象とした教育エンターテインメント番組です。低年齢児にふさわしい情緒や表現、言葉や身体などの発達を助けることをねらいとしています。
「みいつけた！」 ４～６歳対象 月～金；15 分	子どもたちの発育をバランス良く後押しできるよう構成しています。「友達と遊ぶ楽しさ」「いのちの不思議」「自分でできる喜び」「相手を思いやる気持ち」など、子どもたちがさまざまな「発見」を通して、楽しむことができる番組です。